

## 注・参考文献・補説

- 注1 アクティブ・ラーニング授業改革のマスターキー 大杉昭英 明治図書平成29年1月
- 注2 小学校学習指導要領解説道徳編 第3章第1節1(1)1
- 注3 学習内容は、多くの場合、抽象度が高く、概念的で…略…教材は子どもと学習内容をつなぐ連結器」(豊かな教材観にたった授業づくりを 学校教育 広島大付属小№1172 北俊夫)
- 注4 拙稿 言葉を学ぶ国語科と教科書と授業(しぞーか通信特別号 教育出版)
- 注5 学校でなければならない教育とは (展望 2005.06 汐見稔彦 東京大学)  
「…批判を自分の偏見が他者によってただされたと感じ取ることができると、…略…体験と真理・真実の前に自己が謙虚になることの喜びという体験をすることになる。」
- 注6 道徳性：人間としての在り方生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤。道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲と態度と要約されている。前指導要領解説道徳編では「人格の基盤」。
- 注7 「私たちの感覚に付随する独特の質感」クオリア入門 心が脳を感じる時 p36 茂木健一郎 ちくま学芸文庫 2006.3.10 他 「クオリアは言葉では表せず、『他人』の心は見えない」とも
- 注8 2003年9月17日 道徳教育連携・推進講座(第2回中央研修)での横山氏の講義から
- 注9 教育評価における主観の再検討—研究者の諸論を手がかりに— 根津 朋実  
早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)第71号 13～23ページ, 2023年3月

教育評価の客観化にとって、主観の排除は必要か。そもそも、主観抜きで教育評価はありうるか、と根津は問い、教育評価関連の和書等10件前後を対象に、主観や客観、および関連概念の扱いを確認し、整理する、という研究手法をとった。

本稿における安彦論は「表4 主観や主観の重ね合わせに類する言及」からの引用 p19

### <補説>

- 「議論する道徳科」は、答えのないテーマについて、教師と子供同士が対話しながら探究するという点で、1960年代にマシュー・リップマンが提唱した「子供の哲学(P4C)」(子供哲学対話活動)に近いと考えられる。
- 内田は、最近の中学校1年道徳科教科書6社の分析を行った。結果、教材を解釈させて、子どもに教材内容を考えさせたり生活処方を問うたりして構成しているのが大半だった。別添
- ・ずれが表現を引き出す 教材にしかけをつくる 子どもの能動的つづやきを引き出すことを桂は提唱 教師が問い返すから子どもが話す仕組みではだめだと主張  
(国語授業のユニバーサルデザイン(18) 桂聖 KATURA 国語劇場 筑波大附属小9)  
・松下らはエンゲストロームの著「変革を生む研修のデザイン」監修する中で、学習プロセスイメージ、「動機づけ」として①主題に対する意識的・実質的な興味を喚起すること。②学習者が、これまでの知識や経験では目の前の問題に対処できないという事態に直面することをあげている。
- 本学会北海道旭川校大会で「自ら学ぶ子どもの育成を図る教育課程の創造と課題」と題して、自己評価を軸に学びの成立を画し、「自ら学ぶ」生徒の育成を目指した実践例を紹介した。  
(2018.06.30) 参照願いたい。 <http://uchidat.com/report/2curriculum/cull.pdf>
- 内言と外言の発達ではピアジェとヴィゴツキーとの論争があったが、今や外言の後に内言というヴィゴツキー説が定説になっている。内言は小3頃に確立する。
- 本稿執筆にあたり、内田は、根津の研究「教育評価における主観の再検討—研究者の諸論を手がかりに—」(早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)第71号 2023年3月)に大いに刮目された。実践者の多くは、評価は客観的であろうとするが、実際は主観的な評価。茂木健一郎氏の心の全ては脳内現象であるという主張も得て、客観は主観の複合体であるという理解を強くした。茂木氏の諸作には影響を受けた。